「漢字がわかる」ということ

一年のあるクラスの国語の授業におじゃましたときのことです。漢字の勉強をやっていたようで、一人の男子生徒が近くにいた私に質問をしてきました。

「『銘菓』は、何と読むのですか。」

私は答えをすぐに教えるのではなく、考え方を教えました。

「漢字の多くは分解するといいよ。この漢字でいうと、『金』と『名』に分かれるね。片方のパーツが読みを表して、もう一方が意味を表すよ。この場合、『金』が意味で、『名』が読みだね。だから、これは『メイカ』（カタカナで書いた理由がわかりますか？）と読むよ。」

「やったあ、当たっとった！」

「でもね、絶対ということではないからね。漢字の多くはこの方法で読むと当たる確率が高くなるよ！」

前の席の女子生徒も後ろを振り返り、興味深そうに私たちのやり取りを聞いていました。男子生徒は読みが当たって満足な様子でした。

私は次の質問を待っていました。もう一つのパーツの「金」にはどんな意味があるのかという質問です。しかし、彼らは読みが当たったことで十分だったのでしょう。漢字のもつ意味は当たった喜びでかき消されてしまったようです。

「銘」の「金」には次のような意味があります。大昔の中国では、青銅器に大切な文章が彫り込まれていました。「書く」というより「刻む」というイメージです。銅は金属の一種ですから、「金」が意味となります。日本でも、刀や包丁などに製作者の「銘」が入っていますよね。刻まれたものは決して消えることはありません。そういう意味から「感銘」「座右の銘」などという言葉で使われています。

意味と読みを表すパーツがくっついて一つの漢字を構成しているこのような漢字の成り立ちを「形声」と言います。漢字の約八割がこの方法でできあがっているので、これを覚えておくと、思わぬところで役立つことがあります。テストであきらめていた漢字の読みも、確信はないにしても、当たることがあるかもしれませんね。

漢字を身に付ける時に、丸暗記がもっとも効率の悪い方法です。漢字の成り立ちを考えて身に付けると、漢字が予想以上に読めるようになりますし、「漢字がわかる」ことにつながります。日々取り組んでいる漢字テストを、発想を変えて漢字の成り立ちから迫ると、意外と早く、そして確実に習得できるかもしれません。

今日は漢字の話になってしまいましたが、私の言いたかったことは、形式的な勉強を何時間も積み重ねるより、本質に迫った勉強を集中的にやった方が満足のいく結果につながるということです。「勉強とは、できないことをできるようにすること、わからないことをわかるようにすること」これに尽きます。「漢字がわかる」とは、覚えるということではありませんからね。

（十二月十四日　記）